

「潮」1972年7月号 特別企画「隠れて生きる被爆者と人種差別」

ルポルタージュ されこうべの呻く似島

広島被爆後、二十六年にして六百十七体もの
原爆遺骨が発掘された似島を訪れて

大庭みな子

燃え続ける人間の業火

「死体の両足をもってひきずると、足の肉だけが手の中に残って、ずるずると骨が抜けた。膝から下がカカシのように二本の骨がむき出しになった死体をできるだけ見ないように、後向きになって船まで運んだ」

「わたしたちはただ似島へ運搬するだけで、その後どう処理したかはわかりません。だけど、あそこに埋めたのは確かです。厩舎の間の空地に。少なくとも五百体くらいは」

「いや、千体以上だろう」

「それできくものか。あんなに何度も特大発で運搬したんだ。運んだのは死体ばかりではない。生きているやつも運んだが、ばたばた死んだ」

「ガラスの破片をからだ中に突き立てて苦しんでいるのをぬいてやった」

当時、被爆者の遺体や負傷者を宇品から似島へ運搬する作業に当たったひとたちは言う。

「あそこはあの当時、陸軍の検疫所だったけえ。軍隊の中のことはわれわれにはわからなかったですよ。」

「きのうまでうちの子が似島で生きとったと言うて訪ねて来た者おったが、〈け

さがた死んだ〉〈どこへ埋めた〉〈わからん〉 そういう具合だったそうですよ」

似島の村の人たちは言う。

「大きな穴を掘って五、六十体ずつ折り重ねるようにして埋めた。雨が降って、かぶせた土が洗われ、埋めた死体の脚がによっきり突き出していた」

埋葬した者は言う。

そうだ。あのときは全くそんなふうだったのだ。遺体をいちいち確認して火葬できるような状態ではなかった。ただもう一面の焼野原に、火ぶくれの、皮をはがれた生焼けの魚といった人間がうごめき、息をひきとり、そして土を掘って葬むるだけがせいっぱいだったのだ。

そこはこの世のものではない地獄の行進、えんえんと続く、わたしの中で決して死に絶えることのない、永遠に生きつづける、それどころか年月をあらたにすると、不気味に炎の色を変えて燃えつづける人間の業火といった記憶である。

ずるっとむけた背中の皮をひきずって歩く幽霊、目も耳もない赤肌の顔で喚きながら走りつづける幽霊、いや彼等はそのとき確かにその状態で生きていて、手をさしのべ叫んでいたのだ。

そうして死んだ人びとが広島から四キロばかり南にある似島に当時あった陸軍検疫所にも沢山埋められた。

「小屋を建てようと思って掘りおったら、大きな骨が出た。大腿骨じゃろうと思うが、初めは、こりゃ馬の骨じゃろうと言っておった。ところがそのうち、頭蓋骨が出てねえ、顎の中で金歯がきらりと光った。いや、これは人間の骨じゃというこ

とで、それから大騒ぎになった」そのとき工事をしていた大工の森さんは言う。

陸軍の馬匹検疫所だったところは現在、似島中学校になっていて、その校庭の脇の空地に小屋を建てる工事のとき掘りあてたこの白骨がきっかけになって、つぎつぎと六百十七体もの原爆遺骨が発掘されたのである。原爆後、二十六年経った一九七一年（昭和四十六年）十月のことである。

似島を訪ねると、島の駐在さんの上岡さんと、大工の森さんがバイクで発掘現場まで案内してくれた。

「子供の骨もありました。歯を見ればわかりますけえ。乳歯の下から押しあげるような形で永久歯が出かかっておるからねえ」

「掘り出されたとき、骨の具合はどんなだったんでしょう」

「そうですねえ。まあ、特に変わっていたということもないが、なんというか黄色っぽく、でこぼこの感じですかねえ。もう長い間のことじゃ。草や木の根が骨の間から入りこんでのう、頭蓋骨を両手で持って土をふるうと、中にびっしり張った細かい根の間から土くれが落ちて…。それも一体がちゃんと纏ってある、というような状態ではなかった。ただもう折り重なって、やたらに放りこまれて、そのまんまになっておった、という感じじゃった。一坊さんに頼んでお経をあげて貰ったがー。考えてみれば、こういう人があのとき沢山死んだ。また、お陰でわしらが生き残れたようなもんじゃ。もっとも、わたしも戦争には行きましたかねえ」

腐肉を襲い、群がる蠅

一九四五年八月六日、あの美しいきのこ雲の下に広島は瓦礫の原、見渡す限り一本の草の生命、緑の一筋すらない土気色の廃墟となった。ぐらりと傾いた街は灼熱の炎が退くと、ねじれた鉄骨と、怪奇に変形し、くっつき合った焼け瓦と石の間には無数の白骨が散らばっていた。燃え残った死体はあっという間に腐肉となり、その腐肉を襲い、群がる蠅だけがこの死の街を覆う生命だった。十日もすると灰の街は蛆の街になった。そして戦争はやっと終結したのである。

それから二十七年の歳月が過ぎ去った。

わたしたちは実に二十七年ぶりに広島市の街を歩き、そこに全く違う別の街が、美しい近代的な都会が出現しているのを見た。だが、わたしの脳裏に浮かぶのはあの瓦礫の原であり、血膿の中でうごめく目も鼻も定かではない人間の火ぶくれの苦悶であり、穴の中に放りこまれて黒い雨の中で燻っていた死体と、一面の白骨に覆われた街なのである。

わたしは、当時十四歳で、原爆の後、辛うじて一部形骸をとどめ得た、ほとんど爆心地ともいうべきところにあった本川小学校に寝泊まりして被爆者たちの救護作業にあたったのだ。住んでいたのは広島市内ではなく、市の東、二十キロ余り離れた西条という街なのだが、当時広島市は壊滅の有様で、近郊の学生たちは狩り集められて、市内の数か所に設けられた臨時救護所に配属されたのだ。

それは救護というようなものではなく、後から首を押さえられて、「さあ、見るがよい。これが、人間のおとし入れられる地獄のさまだ」と蛆の這う生きた人間の間を、つぎつぎとむくろとなる人間の間を、こづきまわされる悪夢の作業、この地獄のさまを見た生き証人となることを誓わされた、心臓への焼きごてであった。

二十七年前、わたしが確かにその最後を見とどけた人たちの幻が現在の広島のおそこここに建ちならぶ立派なビルの下に、灰色の背を、皮をはがれた肩を、えぐられた脚をうごかして呻いているようにわたしには思えるのだ。この清潔な近代的な都会がどうしても現実のものとは思われないのだ。悪夢の中の幽鬼のほろがわたしの中では生きつづけていて、現在の美しい街は幻のものと思えないのだ。

新緑に輝く平和公園の角を、骨の杖をつき、墨色の衣をまとった亡霊が、ゆらめきながら行きつ戻りつするうちに、緑の木々は裂けた枯木になり、舗装された白い道は瓦礫の原に変じてしまうのだ。

石の像に話しかける老婆

ビルのオフィスで真白なワイシャツにプレスの利いたスーツを着て、ときどきと事務をとっている有能な社員、乳母車の中に赤ん坊をあやしながら木陰を歩く主婦、美しい脚の若い娘たち、長髪の若者の笑顔が、いったい、いつの間に

か、どこからやって来て、このあり得ない広島に街に移り住むようになったのか、わたしはとまどう。

広島に住んでいる人たちを片はしから捕まえて訊いてみるがよい。なんなら二十七年という歳月を計算に入れて、年齢を選んで、原爆を記憶している筈の中年以上の人びとを捕まえてこう訊いてみるがよい。

「いったい、原爆のときはどんなでした。広島にいらっしゃったんで？ どうして難をお逃れになりました？」

「ええ、運よく、その日は広島にいなかったんです。軍隊の仕事で、岡山の方に行っていました」

「子供の疎開先に行っていたんです」

「買い出しに行っていました」

「市のはずれにいましたよ。でも、身内はその後具合が悪くなってつぎつぎにに死にました。わたしも具合が悪くってそう長くは生きないでしょう」

「この火傷を、－これがその跡です。でも、もちろん、爆心地にいたわけじゃありませんよ」

「復員して家に帰ったら、いったいどこがどこなのか、さっぱりわからなかった。生まれて、二十何年か棲んだ街の、自分の家のあった場所がわからなかった。どうにか、この辺りじゃろうと見当をつけて何時間もうろうろし、家族の者はみんな死んだ、と書いてある立札をみつけた。しかし、死体がどこにあるか、そんなことはわかりゃせん。立札の下あたりに落ちている骨を拾って、－それだけだ」

こんな話を聞いた。ある老婆はその日、田舎の親類の家へ行って、帰ってみると一家一族二十数人が被爆していた。その日のうちに死んだ者も、何日か生きていて息をひきとった者もさまざまである。だがとにかく二十数人すべてが死んだ。「水をくれ、水を」と叫びながら、夫も息子も娘も、親も悶絶した。それ以後、老婆にとってはすべての世界はその記憶だけになった。

彼女は二十七年経った今も、毎日ガラスの器に水をはって、二十数個の石を入れ、水の中でゆらめく石の影にあらぬことをぶつぶつと呟きながら暮らしている。「おお、水が飲みたかろう。きれいな水が」彼女は石を浸す水を替え。ゆり動かし、その不思議な光の中でさまざまに形を変える石の像に話しかける。「お前、お前ものう、お前も。ああ、もう、先に行って待っとる者が沢山おる。あんた、あんたもか」

実際、現在、繁栄する広島市の上で生活する人たちは、単に偶然の幸運で、あるいは残酷な星のもとにわけもなく生き長らえた人たちなのだ。原爆の炸裂した直下ではそのほとんどが一〇〇パーセントが死に絶えたといっても過言ではないだろう。直接。あるいは間接に、そのほんの幾分を垣間見た人びとさえも、現在では希少価値ともいうべき生き証人なのだ。広島はそうした記憶の上に、そのまわりから集まった人びとの手によって再建された。だがその記憶は年とともに薄れつつある。残酷な記憶を忘れ得ることは、あるいは人間に残された幸福とも言えるかもしれない。

だが、忘れ去られる記憶は、忘れられない記憶を持つ者に恐怖を呼び起す。人

びとがその記憶を失うことによって、ふたたびその悪夢を現実にくりひろげるのではないかと脅えるからだ。

心臓がひきつる原爆の経験

頭蓋骨の中から芽を吹く草の根をふるいながら、大工の森さんが言ったように、その白骨の上にこそわたしたちは生きのびている。もし、この犠牲者がいなかったら、戦争はもっと長びいていたかおしれない。また、もっと残酷な企みを人類が人類に対して実行に移したかもしれないのだ。

核兵器はまぎれもなく人間の頭脳が考え出したもので、自然に、天災で、天から降ってきたものではない。人間の頭脳で綿密に計算され、人間を殺す目的をもって投下されたものなのだ。

だが、もしその核兵器を、アメリカの代わりに日本が持っていたとしたら、日本はそれを決して使わなかったと誰が証明できるだろう。核兵器の発明は、人類が人類を亡すことができるという証明を、人類がやってのけたということなのだ。

もし今後、人類を救う可能性が人類に残されているとしたら、それは人類の持つ原爆の記憶だけなのだ。

その記憶はどんなに掘り返しても掘り返しすぎることということはない。人間たちは歴史上の人為の災害をしばらくの間は記憶するが、その記憶はいつの間に

か情緒を失い、あやふやな影法師になる。そしてあろうことか、その影法師を自分から手招きしてもう一度呼び寄せる気になる。

わたしもまた偶然、単にその地方にいたということで、原爆の惨事を垣間見た人間の一人だが、原爆の記憶はわたしの中であまりにも巨大なので、そして、それがわたしをつねに窒息させるものだから、小説家としてその記憶をなまのかたちで作品にするのが恐ろしく。いつも首をふる。それは決して消えない心臓のケロイドなので、それを即物的に表現するにも、文学的に表現するにも、心臓がひきつるのだ。それに、亡霊たちが嘲笑っている。「そんなものではないよ。お前さんの筆では書きつくせまいよ」

だが嘲笑いながらも、どんな形にしろ、亡霊たちは影のようにわたしにつき纏い、わたしの文学の中に座りこむ。こう言ってもよい。原爆のイメージはわたしの文学を常に塗りつぶし、そして常に変える。つき纏って離れない亡霊たちはわたしに囁きつづけるのだ。「まだ言い足りない。何か、言い足りない。そういうふうではない」

原爆とは人間が人間に対して犯した罪なのだ。原爆を投下したアメリカを憎み、ユダヤ人を殺したナチを憎むことは犠牲者にとって解決にはならない。すでに人類が核兵器を所有したということは、すべての人間たちが、自分をも含めた人間の欲望を軸に燃えさかる業火を認識したとき目醒める恐怖であり、絶望である。人類が再び原爆の惨禍から逃れるための唯一の道

自分の中の何か、他の人間に対して何かをするかもしれない。— というより

は、自分を含めた人類を滅亡に導くかもしれない、ということ、人それぞれに怖れ、命をかけていましめあう以外にない。

小富士の美しい似島の風景は平和である。宇品からの定期船は十五分でこの島に客を運び、陽光と潮の香のあふれた、おだやかな表情の島の人びとと行きかうと、島を訪れる都会人は心が和む。

似島中学校の校庭では清潔なユニフォームを着た子供たちがボール遊びに興じていた。何でもサッカーは全国二位を勝ちとった有名校とのことだ。

かつて二万に近い被爆者がそこに運ばれ、あるいは死体となって流れついた渚には、睡たげにぬるんだ春の波がたゆんでいた。六百余体の遺体が去年発掘された校庭の脇の空地はまだでこぼことしてなじんでおらず、そこからいくらかも離れていない窪地にある千人塚（原爆後十年余り、数千の遺骨を集めてあった場所）にはみずみずしい緑の無花果の木と葱坊主がゆれていた。

中学校から船着場までは丘を越して二十分ばかり歩かねばならなかったが、丘を越える道はよく舗装され、強い陽ざしの下で、月見草がそこそこに赤くしぼんでいた。